

## 五十歩百歩について

萩 庭 勇

一、はじめに

表題の五字は、所謂人口に膾炙され、萬人が日常自然と口をついて出るほどであり、表現を換えれば既に日本語化の嫌いさえあって今更考究の対象と成り得ない感さえある。が聊か文字就中漢字の古形・古意の考究に携わるものとして、『説文解字』の説解を「傳」と比定すれば、この試行はその「傳」の視点を變える試みに他ならない。所謂五十歩百歩に歸することを認識しつつ！

二、五字は、四書の一つ「孟子・梁惠王章句上」に

孟子對曰、王好戰。請以戰喻。填然鼓之。兵刃既接。棄甲曳兵而後止或百步而後止。或五十步而後止。以五十步笑百步、則何如？ 曰不可。直不百步耳。是亦步也。

とあるによる。さて、管見によれば、先人・先達いずれの説解も「五十歩百歩」は、そのまま「五十歩百歩」とそのまま口語譯され、大同小異、いや小異さえ示されない。つまり些かもこの字句に對する異見を見ないのである。「理」を説いた孟子であるから、その視點からは止むを得ないことではある。が、前述の「傳」を變える視點からすれば一言さしはさむことが……。

三、五字の所謂「傳」の視点を換える鈎は那邊にあるかと言え、  
「五十歩」の「歩」字に存すると思う。従って  
「歩」字について述べることにする。

「歩」字について『説文解字』には

「歩、行也。从止相背」

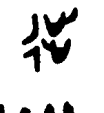
とある。また加藤維軒「漢字の起原」歩字下には

## 【歩】

〔歩〕   



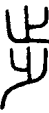
契文



金文



古文



篆文

(字形) 契文の第一字と第二字は「衡」字である。孫海波は「衡」「衡」を歩字と見た。甲骨文編において、「衡」字中にこの字を並べている。「𠂔」字は正確には「𠂔」と書くべきで、道路の交錯した十字路の形象であり、「𠂔」は略形である。であるから、この字は道路を歩く形象である。「𠂔」は道路の形象を略した、ただ歩く形象である。足跡が前後に並んだ形であるから、まさに歩く形である。

(字音) 「補古切」(ホ)である。この音は思うに前趾あしに後趾を相付随するところからきている。説文には「止と止が相背するに従ふ」と言う。この「背」とは借音の字であって、「附」の誤字ではないかと思う。

とある。この二書を見ると、前者（説文）は概言的であるが、後者（漢字の起原）はより詳細に説解されていると言えよう。してみると「歩」字のみを照準とすれば必要條件を満たしている。がさらに闡明せんとすれば十分ではない。拙者の視点では更に「歩」字と密接不離の關係にある「武」字と對比させることが絶対条件であると思うのである。つまり「歩」字と「武」字の關係何如を視界に入れると「歩」字の意味、要するに「五十歩百歩」の眞の姿が見えるのである。

「武」字について、『説文解字』には

「武、楚莊王曰、夫武、定功戢兵、故止戈爲武」

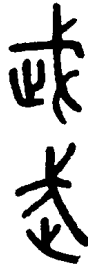
とある。がこれはいわば後義であって原義（或いは起義）とは程遠く、所謂解釋の一語につきる。そこで「歩」字に倣って「武」字について、前掲の

「漢字の起原」武字下に

【武】



契文



金文



篆文

（字形） 説文には、左傳の宣公十二年に見える説明にもとづいて、「戈を止めるを武と爲す」と、會意によって説

明している。一般には、この説が信じられているが、兪樾は「武と舞は同字、武は即ち舞字なり」（見筈録）と言う。そして釋名が「武は舞なり」と言うを、本義を得たものと見ている。私は朱駿聲が別義とし

てこの字を「止に従ひ（意符）戈の聲（聲符）」の形聲字と見るのが正しいと思う。

(字音) 唐韻では「文甫切」(フ)であるが、古音は「戈」(クワ)である。「戈の聲」が「文甫切」(フ)の音に轉じたものと思う。それは「巫」の音が「工の聲」から来していると同じである。

(字義) この字が「止」(趾)に従う字で、歩に比べて一趾に従っているのを見ると、國語の周語に「歩武尺寸の間に過ぎず」とある韋昭の解に

半歩を武と爲す。

とあるが、本義であると思う。また詩經の生民篇に「帝武を覆む」とあり、その他禮記の曲禮には「堂の上にては武を接し、堂の下にては武を布す」とある。原音の「戈」(クワ)の音は、「跨」またぐの意を表している。片足を出す意で、一趾が書いてあるのである。これが、「武」字の全體の意である。半歩を跬きは歩と言ふと同じである。「文」に對立する觀念は、この字の古音が「戈」であることを知ると、ただちに判明する。即ち「戈」字の借用にすぎない。がさらに古い「文武」はんかの音を考えると、實は連言であつて、ある一義を表していると考えるが、これは別論に屬するからここでは述べない。

とあり、搔到痒處なるを禁じ得ない。一言で括れば「歩」字の眞意、それに加えて「武」字の眞意をも見えたのである。四、これを要するに「歩」字の原義を敢えて數値で示せば「二」であり、同じく「武」字の原義を數値で示せば「一」である。ことばを換えれば「歩」字を二で乘法に付せば「武」字となり、逆にいえば「武」字に二で除法に付せば「歩」字となるのである。つまり一步、半歩の概念となる。つまり彼此(中國と日本)の習慣のずれに他ならないのである。従つて日本の一步は秦旦の半歩であり、秦旦の一步は日本の二歩となる。

五、おわりに

右に簡述した「歩」字と「武」字を尺度として總括すれば、五十を二倍にし、加えて百を二倍することになる。若しこれを是とすれば當然「五十歩百歩」は「百歩二百歩」となるのである。この異見や何如？ 笑殺！ 五十歩百歩なり。叱聲を！

〈平成十四年重陽之日於魯魚魯齋〉